

医師の診察と道具

江戸時代の開業医はほとんど自宅を診療所としており、依頼があれば患者の家を往診しました。この頃の医師は現在の薬剤師も兼ねており、診察をした後はその場で自ら調剤して薬を手渡しました。他に患者が待っている場合は、後ほど患者の家族が薬をもらいに行きました。診察の合間には、医学書を読んだり、あるいは自ら執筆するなど、研究に勤しむ医師もいました。

江戸中期以降蘭方医学が盛んになると、解剖や病理学などに関する医学書、西洋の薬物や薬草に関する書物も次第に翻訳されるようになり、医師の医学的知識は従来より格段に増えました。明治時代には、ドイツやイギリスなど西洋医学の医学書も翻訳されたほか、実際の治療に用いる医療器具も導入されるようになりました。

江戸時代の 医師とその道具



医学書

薬包紙

往診用薬箱

薬さじ



生薬(しょうやく)

明治時代の 医師とその道具



瓶入りの西洋薬

聴診器

